

『メアリー・バートン』に見る ワーキング・クラスの女性の自立と職業

宇田 朋子

1

ギaskell夫人は、『メアリー・バートン』の Preface で、そもそも物語の最初の構想では、マンチェスターの工業地帯ではなく、100年以上も前のヨークシャーの田舎を描こうとしていた、と述べてる。

THREE years ago I became anxious (from circumstances that need not be more fully alluded to) to employ myself in writing a work of fiction. Living in Manchester, but with a deep relish and fond admiration for the country, my first thought was to find a frame-work for my story in some rural scene; and I had already made a little progress in a tale, the period of which was more than a century ago, and the place on the borders of Yorkshire, when I bethought me how deep might be the romance in the lives of some of those who elbowed me daily in the busy streets of the town in which I resided.¹⁾

しかし、彼女は、当時住んでいたマンチェスターで日々出会う労働者階級の人々の苦しい生活ぶりを目の当たりにして、興味の方向を 100 年前のヨークシャーの田舎から、彼女が生きていた当時の労働者階級へと移していった。すなわち、『メアリー・バートン』という小説の中心には労働者階級がある。そして、ギaskellが属していたような中流階級は、物語の周縁に押しやられることにより、ギaskellの小説に新しい世界が広がったとも言えるであろう。

さて、一口に「労働者階級」と言われるが、労働者階級とはどのような人々を指しているのだろうか。

『メアリー・バートン』が描かれた19世紀中頃は、英国社会の産業化が進み、ロンドン以外にも大都市ができあがった時代であった。その多くは、工場を沢山もつ、工業都市であった。人々が携わる労働も、農業、及び手工業から、工場での労働へと変わっていき、社会構造が大きく変わった時期でもあった。また、それに伴い、人口も急激に増加し、特に都市部における人口の増加はめざましいものがあった。

『メアリー・バートン』の舞台となっているマンチェスターも、こういった急激に大きくなった工業都市の一つであり、工場の所有者となり、中流階級の上層部へと急速にその地位を上げていったカーソン一家や、搾取される立場のバートン一家やウィルソン一家のようなものたちが集まって、人口5万を越す大都市となっていた。

Patrick Colquhoun, *A Treatise on the Wealth, Power, and Resources of the British Empire, in Every Quarter of the World Including the East Indies* (London: Joseph Mawman, 1814, rep. New York: Johnson Reprint Co., 1965) の中には、19世紀初頭のイギリスの社会構成を分析した表が載っている。これは、『メアリー・バートン』が舞台となっている1830年代よりも時代が30年ほど早いものだが、現代の我々が当時を理解するのに多少は役立つと思われる。

これによると、まず、上流階級とよべるものは、大雑把に言って、貴族、上院議員、地方のジェントリ、高位の公務員など高所得者、及び聖職者のなかでも高位の者たち、裕福な医者、弁護士、銀行家、商人、製造業者などが含まれ、その割合は、英国全人口のわずか2パーセントにも満たないほどであった。

中流階級とよべるのは、上流に属せない程度の聖職者、一般の公務員、商人、医者、弁護士、船舶所有者や、パブなどの店を構えることができた者たち、及び芸術家などであり、その割合は、英国全人口のおよそ23パーセントほどである。

そして、残りの技術工や織工などの職人、工場労働者、農業労働者、家事使用人などの労働者、及び無職や浮浪者、ごろつきなどがいわゆる下層階級であるが、中でも定収入があった労働者たちと、救貧院に世話にならねばならなかったような浮浪者や、町中でよくみられたといわれるごみあさりのような仕事をする者た

ちのなかには、更に厳しい区別があった。

『メアリー・バートン』に登場するカーソン家は、一世代前はジョン・バートンやウィルソンと収入の面ではあまり変わりがなかったようである。

Besides, there's many on 'em as had nought to begin wi': there's Carsons, and Duncombes, and Mengies, and many another, as comed into Manchester with clothes to their back, and that were all, and now they're worth their tens of thousands, a' gotten out of our labour; why the very land as fetched but sixty pound twenty year agone is now worth six hundred, and that, too, is owing to our labour; but look at yo, and see me, and poor Davenport yonder; whatten better are we?²⁾

土地の値段が、60 ポンド、と言っているが、60 ポンドといえば、労働者階級の上層部の年収程度である。それだけの土地を買える、ということは、それだけでジョン・バートン達とは階級が異なるのだが、それにしても、それほど裕福な中流階級ともいえないであろう。その程度から出発したのであった。

このように、事業家や商人など、もともとの地位が中流の下層であった者たちが、工業の発展と共に収入を増し、中流の上層にのし上がっていったのが、丁度この時代の特徴であった。

一方のバートン家、ウィルソン家、そしてマーガレットの家の経済状態は、どのようなものだったのであろうか。

当時の労働者階級の平均収入は、年収 30 から 70 ポンド程度であった。ということは、週給に直すと約 12 シリングから 1 ポンド 7 シリングくらいである。当時の給金は、週給が一般的であった。

『メアリー・バートン』は、5月のあるうららかな午後に、バートン家とウィルソン家が再会し、久々にお茶を楽しむ、という場面から始まる。この時、母のメアリー・バートンは妊娠しており、娘のメアリーは 13 才でまだ働いておらず、長男のトムは以前に病死しており、3 人家族で、一家の働き手はあるじのジョンだけであった。一方のウィルソン家は、双子が生まれただばかりで、双子の兄にあたるジェムはもうすぐ 18 才になる、というところで、はっきりと明記はされて

いないが、おそらくもう働いていたものと思われる。従って、働き手は父親のジョージと長男のジェムの2人で、5人家族であった。

Chapter 2でお茶の準備をするときに、母親のメアリーが娘のメアリーに買い物頼む場面がある。ここを読むと、これだけのごちそうの準備ができた当時のバートン家の財政状態は、思ったほど悪くないと言える。

‘Run, Mary dear, just round the corner, and get some fresh eggs at Tipping’s (you may get one a-piece, that will be five-pence), and see if he has any nice ham cut, that he would let us have a pound of.’

‘Say two pounds, missis, and don’t be stingy,’ chimed in the husband.

‘Well, a pound and a half, Mary. And get it Cumberland ham, for Wilson comes from there-away, and it will have a sort of relish of home with it he’ll like, — and Mary’ (seeing the lassie fain to be off), ‘you must get a pennyworth of milk and a loaf of bread — mind you get it fresh and new — and, and — that’s all, Mary.’

‘No, it’s not all,’ said her husband. ‘Thou must get sixpenny-worth of rum, to warm the tea; thou’ll get it at the “Grapes”. And thou just go to Alice Wilson; he says she lives just right round the corner, under 14, Barber Street’ (this was addressed to his wife), ‘and tell her to come and take her tea with us; she’ll like to see her brother, I’ll be bound, let alone Jane and the twins.’³⁾

このように、タマゴ、カンバーランドハム、牛乳、パン、そして紅茶に入れるためのラム酒を買い、友人一家を招いて一緒にお茶を楽しむ、というのは、ある程度の余裕がなければ出来ないことである。しかも、当時の労働者階級が食べていた食物には、かなりの粗悪品があり、紅茶などは、当時の労働者階級が普通に飲むものは、中流階級の人たちが一度飲んだお茶がらを集めてきて、それを又乾燥させ、染料で色を付けたものや、トネリコなどの葉を乾燥させたものを入れて増量した、粗悪品がほとんどであった。又、当時の労働者の家計簿を見ると、タマゴやハム、といった支出はほとんどなく、収入が少なければ少ないほど、一日

の食事のほとんどはパンと紅茶だけ、という粗末なものであった。⁴⁾

それにもかかわらず、ハムもカンバーランドハム、と上等を指定し、1つ1ペニーのタマゴや牛乳、ラム酒で香り付けしたお茶を、非常にまれな贅沢とは言え、楽しむことが出来たということは、これが、お茶会というよりはむしろ夕食ととらえるべき性質のものであったにせよ、この時のバートン家が、労働者階級の中でも安定した、割と良い収入を得ていた、ということの意味する。

しかし、妻を出産のために亡くし、労働運動に傾倒していったジョン・バートンは、やがて工場主と対決するようになり、その収入もどんどん減っていく。また、時代も好景気と不景気を繰り返し、更にカーソン工場が火事に遭ってしまったため、ウィルソンは失業する。

工場主が、工場を大きくして中流階級の下層から上層へとの上上がっていく一方で、貧しい者たちは、その貧しさに加速がかかっていった。つまり、持てる者と持たざる者の格差がどんどんと広がっていった時代でもあったのだ。

その一例が、カーソン工場でウィルソンと一緒に働いていた、ベン・ダブンポートであろう。彼の家は、ただでさえ子沢山で稼ぎ主はベン一人であったのだが、それに加え、工場の火事による失業、病気と、ダブンポート一家を次々と不幸が襲っていく。彼の家には、石炭一つ、ジャガイモ1かけすらない、まさに下層の中でも下層といえる暮らしであった。

ダブンポート家の惨状を聞いたジョン・バートンは、彼自身が仕事が減らされておき、余裕がないにも関わらず、彼らを助けるために、大切にしていた上等の上着と、シルクのポケットチーフを質に入れて、5シリングを手に入れた。この5シリングで、彼は、肉やパン、ろうそく、それに、重さ200ポンドの石炭などを買い、それでもなお現金が少し彼の手元に残る。つまり、5シリング、というのは、貧しい労働者階級の日常生活ではそれ位使い度がある額であった。

その一方で、中流の、収入から言えば上層にいると思われるカーソン一家にとっては、5シリングははした金とも言える金額である。ウィルソンが、ダブンポートのために入院許可証をミスター・カーソンにもらいに行ったとき、丁度カーソンの下の娘、メアリーとほとんど同い年のエイミーが、1つ半ギニー(10シリング6ペンス)のバラの花を父親にねだっているところであった。バラの花に10シリングは、さすがのカーソンにとっても高い買い物のものであったが、そ

れでも父親は買ってあげるつもりになっていた。つまり、娘のことを思えば、それくらいの贅沢は出来る、という程度の額なのだ。

ジョン・バートンが、自分にとって大切な、一張羅の上着やポケットチーフを質に入れてまで手に入れた5シリングは、皮肉にも、ミスター・カースンの息子、ハリー・カースンがポケットに手を入れて、かわいそうな労働者一家のために、とウィルスンに恵んだのと同じ金額であった。このエピソードだけでも、同じ5シリングの価値が、中流階級と労働者階級にとってどれほどの違いがあるのか、窺うことができる。

このように、ギヤスケルの描写は、特に労働者階級の貧しい暮らし、そして「貧しさがもたらす悲劇」というものを、はっきりと浮かび上がらせている。それ故に、この小説は、社会派小説として、かなりの成功を収めているといえるのである。

2

次に、『メアリー・バートン』における、女性の立場を検証してみたい。

この小説には、様々な立場の女性が登場する。労働者階級に限ってみても、専業主婦で、家事とせいぜい裁縫くらいしかしない主婦のジェイン・ウィルスン、薬草を摘み、それを薬にしてわずかな収入を得、生涯独身で自活生活を送ったアリス・ウィルスン、メアリーの同僚で、お針子として働くサリー、専業主婦であったが、夫と死別したために家計を支えるべく働きに出ることになったミス・ダブoport、「誤った」⁵⁾人生設計のために、工場労働者からついには街の女へと身を落とし、最後は不幸な生涯を終えるエスタ叔母、メアリーの友人で、お針子をしていたが失明のためにその職を失うマーガレット・ジェニングス、そしてもちろん主人公メアリー・バートン自身などである。この中から、メアリーとマーガレットを代表として選び、この作品が執筆された当時の女性の職業と自立に関して考察することにする。

妻の死後、ジョン・バートンは、次第にチャーティスト運動に傾倒していき、それに比例して、彼は扱いつらい労働者として、徐々に仕事が減らされていく。元々、労働者階級の生き方としてはごく当たり前のことだが、貯蓄などには興味

がなく、もらった給料はすべて使い果たすのが当然だったジョン・バートンにとって、仕事がなければそれがそのまま収入減として、生活苦に繋がっていく。

そのような中で、母親を亡くしたため、早くから家事を切り盛りしていたメアリーも、外に働きに出ざるを得なくなる。当時の労働者階級の女性の働き口として、一番収入が良かったのは、工場で働くことであった。しかし、メアリーにとっては叔母に当たるエスタが、工場で働いて得た自由なお金を洋服など贅沢品に使い、周りの男性からちやほやされたあげくに、間違った人生設計をしてジョン・バートン一家の家から独立し、その後、音信不通になる、ということがあり、エスタを心配するあまりにメアリーの母の心痛が大きく、それが彼女の死に繋がっていった、と考える父ジョンの、「女性を工場で働かせ、給金をもらうようになるとうろくな事にならない」という思いから、メアリーはお針子として働くことになる。当時のお針子の労働環境は厳しいもので、1833年の工場法などの法律で、工場で働く女性、子供の労働時間は決められて保護されていたが、お針子は夜中まで働くことも珍しくなく、特に冠婚葬祭などの理由で沢山の洋服の注文があったときには、何日も徹夜で働くことも珍しくなかった。

しかし、メアリーが働くことに決めたとお針子としての仕事は、収入の面ではあまり生活の助けにはならなかった。メアリーがお針子として就職することになったシモンズさんの所でも、2年間は無給、その後もお茶と食事はつくが給料はほんのわずかの額を、しかも週給ではなく年に4度の季節払い、という、ほとんどただ働きのような状況であった。

...; where the workwomen were called 'her young ladies'; and where Mary was to work for two years without any remuneration, on consideration of being taught the business; and where afterwards she was to dine and have tea, with a small quarterly salary (paid quarterly, because so much more genteel than by week), a *very* small one, divisible into a minute weekly pittance. In summer she was to be there by six, bringing her day's meals during the first two years; in winter she was not to come till after breakfast. Her time for returning home at night must always depend upon the quantity of work Miss

Simmonds had to do.⁶⁾

しかし、これは誇張されていたわけではなく、当時のお針子は、仕事を教えてもらうために徒弟に入るのと同じことだったからである。もし腕が良ければ、2年後にはプライベートに顧客がつき、腕次第ではやがて自分自身が若いお針子を雇えるようになるというシステムであった。

従って、メアリーが外に働きにできるようになった、といっても、メアリーが一人前の仕立屋になるまでは、バートン家の家計を助けるまでにはほど遠いものであった。しかも、ジョンはますます労働組合の仕事が忙しくなり、それと同時に、当然のことながら、そのような活動をしているということで雇用者側からはうとうしがられ、遂に彼は、職を失ってしまう。この頃のバートン家は、もしメアリー一人だけなら、シモンズさんのところで食べ物もらえるのでどうにか暮らしていけたかもしれないが、とても大人二人が暮らせるような家計状況にはなかった。物語の中盤になると、メアリーたちは、質屋に頼って暮らしていることがわかる。

ここに、バートン家の問題点が見えてくる。つまり、女性が職業を持ち、お金を稼ぐようになると、人生を誤る、というエスタの呪縛から、ジョン・バートンはメアリーに、家計を支えることができたかも知れなかった工場勤務を許さず、技術を身につけるまではほとんどただ働きをしなければならぬお針子という職業を選ばせる。その一方で、自らは、その思想のもと、労働者のための運動に傾倒していき、ジョンの収入はどんどん減っていき、一家は苦しい生活を強いられることとなるのだ。ここには、一家の主な収入源がメアリーになる、という考えは、一切見られない。

一方、メアリーの友人のマーガレット・ジェニングスも、メアリーと同じお針子であった。しかし、この家は、マーガレットの祖父ジョブ・リーがまだ現役で働いていたこと、マーガレットもお針子として収入を得ていたことから、ジョブが1つ2シリングもするサソリの標本を買うことが出来るくらいの生活はしていた。しかし、祖父の道楽のため、マーガレットの家も、貯蓄をするほどの余裕はなかった。というよりは、むしろ、当時の労働者階級の家庭では、貯蓄、という概念があまりなく、あればあるだけのものを使えばよい、という考えが一般

的であったということであろう。従って、後に、ジェム・ウィルスンが、機械の発明で特許を得て、工場の持ち主から報奨金として 300 ポンド程度を手に入れたときも、全額を一度にもらい、それを銀行に預けて利子をもろう、という方法を選ばずに、年に 20 ポンドの分割払いにしてもらうことにしたのであろう。

マーガレットの家は、祖父の収入とマーガレットの収入両方に頼って生活していたが、お針子という仕事はかなり労働環境が悪く、夜遅くまで細かい手仕事を余儀なくされるため、目を悪くすることも珍しくなかった。マーガレットも、仕事上の無理がたたって、失明してしまう。だが、マーガレットは、家計を支えるために、失明したとしても自分が働かなければならないと思っていた。

マーガレットが心配するように、普通、失明した女性に働き口はほとんどなかった。しかし、マーガレットの場合、歌の才能に恵まれていたために、歌手として家計を支えることができた。マーガレットが初めて歌手として稼いだとき、彼女は一日で 1 ソヴェリン (1 ポンド金貨) を手に入れる。その後も定期的に歌を歌うことで稼ぎ、祖父が仕事をしなくても十分安定して暮らせる様になる。

しかし、メアリーが、自分で収入を得ることで墮落していったエステルと異なる点は、彼女は生活を収入に合わせて贅沢に変えることをせず、貯蓄をすることすらできた、という点である。これは、メアリーが、失明というハンディを負っているからであろう。そして、ジョンが失業して苦しい生活を強いられたとき、ジェムのアリバイを証明するためにメアリーがリバプールに出かけることを決意したとき、マーガレットがメアリーを金銭的に援助してあげるのだ。その額はかなりにのぼり、マーガレットは、収入面から言えば、中流階級の下層とあまり変わらない程度あったと考えられ、彼女は、自分で稼いで自分で生活ができる、いわば「自立」した女性となったのである。

このように、労働者階級の生活環境を考えると、女性が職業を持つ、ということは、家計を支えるために必然であり、上流階級や中流階級の女性が「生き甲斐」や「当然の義務として」ボランティア活動をしていたのとは全く違う、といえる。生きるために働いていたのであって、それが、生活の上での「自立」には繋がっていたが、精神的な、あるいは、一個の人間としてのアイデンティティの確立に繋がるような自立とは違った。言い換えれば、彼女たちの場合は、職業を持つことが必ずしも自立とは言えないのである。

ギヤスケルは、この「収入を得たがために、自己のアイデンティティを失った」ような、いわば失敗例を2つ出している。一人は、前から述べているように、エスタである。彼女は、収入の多くを、外見を飾るために使い、そのために、ろくでもない男にだまされるのである。もちろん、最初の3年ほどは、エスタもその男との間に娘もできて、結婚こそしていないものの、幸せな生活を送ることができた。しかし、結局男に捨てられ、もらった50ポンドでどうにか母娘2人生活していこうとしたが、エスタによると、「お金の価値を知らなかった」(But I did not know the value of money. Formerly I had earned it easily enough at the factory, ...)のために、娘が病気になったときにうまくやりくりがつかなくなり、彼女は街の女へと墮落していったのである。

もう一人は、生涯独身を貫いた、アリスである。彼女は、この小説の前半で、メアリーに、彼女が給金が良い、という理由からふるさとを離れてマンチェスターにきて、女中の仕事をしていたが、結局母が亡くなるまで会うことができずに、そのことをひどく後悔している、ということを語るのである。アリスの場合は、貧しい実家にお金を持たずに帰ることは、かえって家族に迷惑をかけるであろう、という思いやりもあって、気楽に帰省することができなかったのだが、それにしても、アリスは、お金のためにふるさとを離れたことを死ぬまで後悔しているのである。

この二人の例を物語の前半と中盤で繰り返すことによって、ギヤスケルは、読者に、女性の人生の幸せと、外で仕事を持って金を稼ぐことが必ずしも一致しない、ということを強くアピールするのである。

3

では、『メアリー・バートン』における女性の幸せとは、結局何なのであろうか。

マーガレットの場合、歌手として良い稼ぎを得ることが出来るようになり、経済的に自立し、人間としても自分の才能を生かす術を知った、現代の価値観から判断しても「自立している」と言える女性となった。しかし、マーガレットには、その分、失明、という肉体的ハンデが与えられることにより、結局のところ日常

生活の上では他人を頼らなければ生きてはいけない、という点で、完全に自立することはできなかった。彼女が手術を受け、目が見えるようになり、このハンデを克服したとき、彼女の経済的、あるいは人間としての自立は脅かされることになる。というのも、この物語の最後のエピソードには、マーガレットが手術を受けて目が見えるようになった、というニュースが語られ、そこには暗にマーガレットがウィル・ウィルスンと結婚し、主婦になる、という平凡な未来が示唆されているからだ。

'They've done something to Margaret to give her back her sight!' exclaimed she.

'They have. She has been couched, and can see as well as ever. She and Will are to be married on the twenty-fifth of this month, and he's bringing her out here next voyage; and Job Legh talks of coming, too, — not to see you, Mary, — nor you, mother, — nor you, my little hero' (kissing him), 'but to try and pick up a few specimens of Canadian insects, Will says. All the compliment is to the earwigs, you see, mother!' 8)

一方、メアリーの場合はどうであろうか。

裁判で汚名がそそがれたとはいえ、ジェムは人々の噂から逃れることは出来なかった。ジェムが働いていた工場の持ち主、ダンコムさんは、ジェムが無実であると信じていたが、それでも彼に、カナダへの移住を勧める。その上、ジェムには、メアリーの心配もあった。つまり、いずれはカースン氏の口から、あるいは人々の噂で、ジョン・バートンが殺人犯であったことがばれ、メアリーは「犯罪者の娘」というレッテルを貼られることになり、辛い生活を送らねばならなくなるであろうと心配したのである。それで、彼は、メアリーと母を連れて、カナダに移住することを決意する。

この当時、カナダやオーストラリア、ニュージーランドなどへの移住は、珍しいことではなかった。そして、新天地でのメアリー達の生活が、最後の chapter に少しだけ描かれている。それは、メアリーが夫とともに働いて家計を支え、家

族をともに築いている姿ではなく、母国イギリスでは中流階級の女性がしているような、つまり、家事をこなし、育児をしながら、外で働いて帰ってくる夫を待つ、主婦であるメアリーの姿である。そこには、夫に養ってもらっている女性の平凡な幸せが描かれているようである。

そして、『メアリー・バートン』が執筆された1845年、という時代を考えるのと、残念ながら、それが限界であったのだろう。つまり、結局のところ、女性の幸せは、結婚をし、家庭を守り、育児をして、夫を待つ、というところにあるのであって、それが生活のためであれ何のためであれ、お針子や工場で働くことではない、という、「ドメスティックイデオロギー」（家庭重視イデオロギー）が、この小説を支配しているのである。お針子として働いていた頃のメアリーの苦勞と、カナダで子育てをしながら幸せそうに夫の帰りを待つメアリーの姿を対比させ、ハッピーエンディングに主婦としてのメアリーの幸せそうな姿を描くことにより、労働者階級の女性が外で仕事を持ち、家計を支えることは、生活苦のためにしなければならないかわいそうな状況であって、もし逃れることができるならば、家庭に入って夫の収入に支えてもらう生活が幸せである、というイデオロギーが浮かび上がってくるのである。

果たしてこれがギヤスケル夫人が本当に書きたかったハッピーエンディングなのかどうかは、この作品を読んだだけでははっきりとは言い切れない。というのも、最初にも述べたとおり、この作品は、ギヤスケル夫人が実際に見聞きした労働者階級の生活を描写して書いている、という性格がかなり強いからである。事実、この作品では、工場で働く人々の日常生活や、ジョン・バートンが深く関わるようになったチャーティスト運動の様子、そして、エスタ叔母のように落ちぶれていく人の様子などが非常に生き生きと描かれている。

それに比べて、カースン家の生活や、幸せな結婚生活を送るメアリーの姿などは、労働者の悲惨さほどのインパクトを読者には与えない。むしろそれらは、ギヤスケルにとって、労働者階級の生活の悲惨さをより生々しく浮き上がらせるための小道具にすぎなかったのではないかとすら思えてくる。

更に、この作品は、ギヤスケル夫人にとって最初に出版された作品である、ということも、考慮すべき重要な点であろう。作家としてまだ確立されていないうちから、社会的コンセンサスに反するような作品を持つてくることは、無名の作

家にとっては冒険であるといえる。本を売る側にとっても都合があまり良くないことであろう。

例えば、この作品には、様々な人物が登場するが、「悪人」は登場しない。この作品の中で一番うっとうしい人物とも言えるサリー・レッドピターにしても、彼女はおそらくありふれたおしゃべり好きのお節介焼きの娘に過ぎず、彼女なりによかれと思ってやっていることが、たまたまメアリーにとってはうっとうしいだけに過ぎないのである。この作品における一番の悪は、「社会」なのである。従って、この作品の中に、ギaskell夫人の個人的な考えが読みとれるかどうかは疑問である。むしろ、当時の社会的通念に迎合するような形で作品を仕上げたと考えると、いかにこの当時のドメスティック・イデオロギーが、中流階級のみならず、あらゆる社会階級に広く浸透したものであったのか、がはっきりしてくるのである。

注

- 1) Gaskell, Elizabeth, *Mary Barton: A Tale of Manchester Life* (London: Chapman and Hill, 1848, rep. in Penguin Classics, 1985) p.37.
- 2) *Ibid.*, p.104.
- 3) *Ibid.*, pp.50-51.
- 4) 角山榮・川北稔編 『路地裏の大英帝国 イギリス都市生活史』(1982年 平凡社) 主に「3 白いパンと一杯の紅茶」を参照した。また、Kristine Hughes, *The Writer's Guide to Everyday Life in Regency and Victorian England* (Cincinnati, Ohio: Writer's Digest Books, 1998) にも、紅茶の品質についての説明が載っているので、参考にした。
- 5) エスタの生き方が、「誤った人生設計のために墮落していった」と考えているのは、ジョンである。また、エスタ自身も、彼女が街の女に身を落とした落としたことを後悔しているが、エスタ自身は、それが、「お金の価値を知らなかったから」であると認識している。現代の感覚から言えば、エスタは単に男性運が悪かっただけ、という考え方もできるであろう。というのは、エスタの恋人は、エスタに結婚を約束していたからである。それが口約束にすぎないものであったにせよ、エスタが恋人と一緒に暮らした3年間は、とても幸せな期間であった。又、エスタは子宝にも恵まれていたからである。もしエスタが間違っていたとしたら、恋人の結婚の約束を信じて、工場勤めを止めてしまったことであろう。もし、エスタが工場で働き続けていたら、3年後、恋

人がアイルランドに転勤になって置いて行かれてしまったときも、その後の生活の心配はさほどなかったはずである。

6) Gaskell, *op. cit.*, p.63.

7) *Ibid.*, p.210. なお、本文中には、本当にエスタが男に捨てられたどうかは明記されていない。ただ、その男と連絡が取れなくなった、とあるだけである。(I wrote over and over to her father for help, but he must have changed his quarters, for I never got his answer.) だが、アイルランドに転勤になったとき、エスタと娘を連れて行かなかった、ということ自体が、エスタを捨てた、といっても過言ではないであろう。

8) *Ibid.*, p.466.

註以外には、以下の図書を参考にした。

長島伸一 『世紀末までの大英帝国 近代イギリス社会生活史素描』(1987年 法政大学出版社)

Stoneman, Patsy, *Elizabeth Gaskell* (Brighton: Harvester Press, 1987)